奈良の歴史的建造物と免震

帝塚山大学　教授　三山　剛史

1　奈良の歴史を感じる時

縁あって私が奈良に移り住んで4年が過ぎようとしています。奈良は修学旅行で訪れる場所として有名で、私も中学生の時に来たことがありました。今でも多くの学生や観光客が東大寺、興福寺、薬師寺などの寺院に訪れて奈良時代に考えを馳せています。私が奈良に来た当初は歴史的建造物の多くある地域だからともかく見て回ろうと1日に4か所、5か所と見学していました。しかし、一度にたくさん見ると、1日のなかで感動がだんだんと薄くなることに気がつきました。それからはゆっくり一つの場所で建物の荘厳さや歴史を感じとるようになってきました。

奈良に来て奈良の歴史を強く意識したのは橿原市にある本薬師寺跡地でした。現在の薬師寺は平城遷都のときにこの場所から現在の奈良市の南部に移築されたものです。本薬師寺跡には礎石が残っており、周りの休耕田はホテイアオイが植えてあります。私が訪れたのはその開花時期の8月で、観光客が多く来ていました。その時、礎石のそばで何気なしに小石を拾いました。その小石はよく見ると片面に布目が入っており、奈良時代に用いられた瓦のかけらのように見えました。本当に奈良時代のものかどうかは私にはわかりませんが、その時私は足元の自分が踏んでいる土の中に奈良時代を発見した気がしました。

二月堂に行った時も同じような経験をしました。参道の石段に何種類かの石が用いられており、明らかに補修を繰り返した跡でした。角ばった石は比較的新しいもので、丸くなった石は古くからそこにあったもののようでした。参道を補修する時にそれまで使われていた石をどこか他の場所に持って行って新しい石だけで作るとは思えません。丸くなった石が奈良時代のものかどうかはわかりませんが、自分が何気なく踏んでいる石は実は聖武天皇が踏んだ石かもしれません。確かなことは、地面の下には奈良時代からの土や石があるはずで、何かの遺構がそこかしこにあるということです。国宝や歴史的建造物でないところにも奈良時代からの歴史があり、奈良の風景の一部になっているのです。

2　歴史の中の仏像

昨年の11月には元興寺の禅室屋根裏見学会に行きました。元興寺は飛鳥寺が平城遷都により奈良に新築移転された建物で、興福寺と並んで大きな寺地を有していた建物だそうです。禅室は1943年から1951年にかけて修理された建物で、その屋根裏に用いられている木材には他の建物の材料を再利用したものが多く使われています。最も古い材料は飛鳥寺から持ってきた梁で1400年前に伐採されたものです。現存する最古の建築木材に触り、掌に歴史を感じることができました。

興福寺の阿弥陀如来像は一昨年の4月から6月にかけて東京博物館平成館で公開されました。興福寺にあるときは仏像として正面から拝観できるようになっていますが、東京博物館では阿弥陀如来像の周りを見学者が回れるようになっており、側面や背面を見ることができました。博物館に展示されていること、背面まで見ることができることから阿弥陀如来像は仏像というより芸術品として扱われていると感じました。もちろん東京博物館で阿弥陀如来像に手を合わせている人はいませんでした。

また、同じく興福寺では創建1300年を記念して五重塔初層の特別公開が昨年11月に行われました。奈良に来る観光客のほとんどはその建物の外観を見ていると思いますが、中に入るチャンスは少ないはずです。うす暗い建物の中に格子戸から差し込む光の中で埃をかぶって阿弥陀三尊像、弥勒三尊像、薬師三尊像、釈迦三尊像が並んでいました。単純に建物の構造に興味があったので見学に行ったのですが、無意識のうちに阿弥陀三尊像の前で手を合せてしま

いました。これらの仏像が阿弥陀如来像と同じように東京博物館に展示してあったら手を合わせることなく美術品として鑑賞していたと思います。

奈良という場所、寺、仏像が一体となって奈良の歴史と文化を醸し出しています。建材としての木材も仏像も単体で存在するのではなく、バックグラウンドとしての場所や建物、これまでの経緯を背負ってそこに存在し、歴史や感動を与えてくれています。もちろん、建物は何度も修復を繰り返し、大きさの変更や建設場所の変更もあったでしょうが、それも含めての歴史だと思います。

3　歴史的建造物の免震化

奈良には多くの歴史的建造物があります。国宝となっている建造物の数は日本で最も多く62件あります。これらは長い歴史の中で戦禍、地震や落雷による自然災害、経年劣化により幾度もの修復や改修を経てきた建物です。建物の中には多くの仏具や仏像が置かれています。このような建物と仏像の耐震安全性を考えると現状では免震による耐震補強が好ましいはずです。しかし、これまで述べたように建物は貴重な文化財ですが、その建物の建っている礎石や地盤にも長い歴史があります。地盤を掘削して大きなコンクリートの塊で地上にある建物を支持する一般的な免震構造を適用すると、何が埋まっているかわからない建物の下を壊す可能性があります。地盤をそのまま保存できるような新しい免震技術の開発が必要です。そのため急いで耐震性を高める免震化の必要はないと考えられます。多くの寺院はその時代の技術で何度も改修を繰り返してきています。改修の時期に合わせてその時の最善の技術で補強ができればよいはずです。その時までに適切な免震技術が開発されることを願っています。

4　平城遷都1300年祭

奈良は昨年、平城遷都1300年祭がおこなわれました。平城宮跡の大極殿を中心に多くの催しが行われ、多くの人が奈良を訪れました。平城宮跡会場への入場者は4月24日から11月7日の期間でおおよそ36万人を数えました。昨年末の建築雑誌12月号にこの平城遷都1300年祭について特集が組まれています。7世紀から11世紀ごろの官庁や役所の跡として東アジアの中でそっくり残っているのは平城宮跡だけです。平城宮跡に開発の波が押し寄せてきたため、保存活動が活発になったそうです。平城宮跡の中はもちろん、外でも建築工事で掘削をすると木簡や瓦が出てきます。そのため、1300年祭のために建てられた仮設の施設も埋設物や遺構があるかもしれない地下部分を破壊しないように盛土がしてありました。

平城宮跡の中心となる建物は幅22m、奥行20m、高さ27mの大極殿で、免震建物として復元されています。中には高御座（たかみくら）がおかれ、小壁には上村淳之氏により東西南北に青龍、白虎、朱雀、玄武の四神、その他の壁に十二支、天井には蓮華を図案化した絵が描かれています。ここを訪れた多くの人は天井を見て、小壁を見て、感動して帰っていました。

この建物の建設工事中に何度か見学会が行われています。現場では“ちょうな”や“やり鉋”による木材加工や瓦の製作の様子などを見学できました。この見学で感じたのはこの復元には三つの大きな意味があるということです。一つは技術の伝承です。コンスタントにこのような建物を建設することで建築技術が伝承され、さらに建築資材の確保などが可能となることです。二つ目は建設するにあたって不明な部分が研究課題として現れることです。創建時の状態がわからない中で、それを様々な資料から予測して大極殿を修復しています。この研究の成果は奈良の歴史の解明につながっています。三つ目は多くの観光客をひきつけることができたということです。この建物を見て奈良時代の歴史に興味を持つ人も増えたことはよかったと思います。残念なことは、1300年祭のコンセプトとはずれますが、免震層の見学ができなかったことです。一般の人に免震層を見せて、免震の安全性の高さを説明できれば、建物の耐震性について考えてもらうチャンスが作れたはずだと思います。

5　奈良の公共建物の耐震補強

奈良は歴史的建造物に改修の手を加えて保存してきた歴史はあるのですが、公立学校の耐震補強は進んでいません。耐震補強率は文部科学省の調べでは全国で39位に位置しています。行政が取り組むことではありますが、一般の人の興味がないこともこの順位に影響していると思われます。奈良に住んでいる人間としてこの問題にできる範囲で取り組む必要を感じています。